




壺内タオルのかつての
会社パンフレット

オーガニックコットン 100%の plantia を東京へ情報発信

壺内卓氏は、自社ブランドの plantia をたくさんの人に知ってもらうために、2012年5月、村上タオル（株）と共同で東京スカイツリーの「ソラマチ」に出店した。3年間という限られた期間ではあったが、多くの人がオーガニックコットンのタオルを贈答用として、あるいは自分用として興味をもって購入してくれた。東京スカイツリーが開業した 2012

年当初は観光客がおもな購入者であったが、“スカイツリーブーム”が落ち着くと「今治タオルを売っているところがなかなかないのよね」と言って地元の人たちが買いに来てくれた。とくによく売れた商品は、タオルハンカチやヘアバンドなどの小物タオルであった。

壺内タオルの最近の動向として、一般財団法人オーガニックフォーラムジャパン（OFJ） 主催のオーガニックライフスタイル EXPO に 2019年より参加しており、2022年9月16日～18日に東京都立産業貿易センターにて開催された第7回にも出店を果たしている。

organic cotton and beyond

～オーガニックコットンのその先へ～

壺内タオルの古い会社パンフレットには「organic cotton and beyond」と書かれている。このキャッチフレーズのように、壺内氏はオーガニックコットンのその先を見据えている。しかし、オーガ

ニックコットンを広める活動はそうスムーズではない。言うなれば、前途多難である。現代社会が数十年、数百年後の安全安心な生活よりも、目先の利益を優先する社会だからである。産業革命以来、人間は、技術革新を起こし、モノの集積を実現し、物質的な豊かさを享受してきた。その一方で、自然環境が破壊され、地球規模での貧富の差が生まれるなど大きな犠牲を払ってきた。とくに自然環境について言えば、われわれが住んでいる世界は100年前の世界とまるで違う。環境問題は、待ったなしの状況まで来ている。われわれ一人ひとりの意識の問題であるが、意識改革の道のりは険しい。それでも壺内氏は、数十年後、数百年後を見据えて、安心安全な社会のためにできることをする。「高級じゃなくていい。ナチュラルなことがやりたいですね。」

嘘をつかず、誠実でいること

壺内氏が商売にかぎらず、つねに心がけているのは「誠実でいること」である。これからのタオル業界や社会を背負う若者に伝えたいのも、「嘘をつかず、誠実でいること」である。そうすれば必ず道は開ける。



壺内タオル本社内にあるショールーム

にはオーガニックコットンを使った

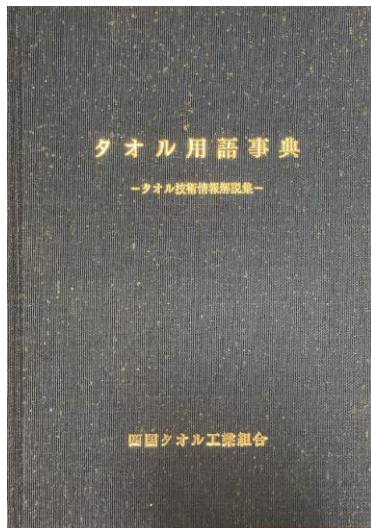
自社ブランドが展示されている

大学を卒業後、銀行からキャリアをスタートさせた壺内氏は、両親の体調や生活を案じ、帰今して壺内タオルの3代目を継承した。父親が先鞭を付けた糸商の業務を継続しながら、自らの信念のもとで「作り手も使い手も、みなが幸せになる」ためにアクションを起こし、環境にやさしい綿糸の供給と製品の開発に努めている。壺内タオルのパンフレットにある決意

表明には、壺内氏の誠実さが滲み出ている。

4. 何度も繰り返し読んでいる本・感銘を受けた本

壺内氏がタオル業界に入って何度も繰り返し読んだ本が『タオル用語事典：タオル技術情報解説集』（四国タオル工業組合編、四国タオル工業組合、1995年）と『新しい繊維の知識』増補新版（吉川和志、鎌倉書房、1988年）である。壺内タオルに入社後、壺内氏はタオルに関する知識を修得する際にテキストとして活用した。特に、この2冊の本は緻密に構成されており、内容も充実している。



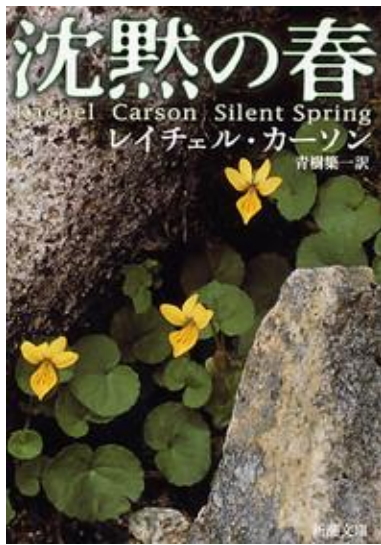
左：四国タオル工業組合編『タオル用語事典：タオル技術情報解説集』四国タオル工業組合、1995年。

右：吉川和志『新しい繊維の知識』（別冊 改訂第3版）、鎌倉書房、1994年（鎌倉書房：1994年10月破産、書影：タオルびと制作プロジェクト現物撮影・掲載）

壺内氏が感銘を受けた本と言え、『沈黙の春』である。会社パンフレットの「決意表明」にも触れられているが、レイチェル・カー

ソン（1907年生-1964年没）による人類への警鐘本である。

カーソンは、アメリカのペンシルベニア州スプリングデールの農場主の子供として生まれた。ペンシルベニア女子大学で生物学を学び、ジョン・ホプキンス大学大学院において動物発生学で修士号を取得した。その後、アメリカ連邦漁業局（NMFS: National Marine Fisheries Service）・魚類野生生物局（USFWS: United States Fish and Wildlife Service）の職員として働き、海洋生物学にどっぷり浸かり、専門知識を身に付けていった。1962年に出版された『沈黙の春』では、化学薬品の無差別的な散布は自然を破壊し人体を蝕んでいくという恐ろしさを、カーソンの専門知識を基礎として説得力のある文体で語られている。



レイチェル・カーソン、青樹築一訳『沈黙の春』新潮社、2001年（今治市立図書館所蔵）

（書影は新潮社HPより引用）

『沈黙の春』は、世界中の人に読まれたベストセラー本であるが、カーソンが伝えたかったことは半世紀以上たった現代社会においてさえ大勢になっていない。歴史に学ぶ大切さを知りながら、それができないのは人間の弱さであり、愚かさでもある。しかし、小勢でも諦めず誠実に前を向いて動きつづけることでカーソンの意志は継承される。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

NPO 法人日本オーガニックコットン流通機構パンフレット。

壺内タオル（株）「オーガニックコットンのお話」（壺内タオル提供資料）。

豊島（株）ホームページ（<https://www.toyoshima.co.jp>）。

綿スフ織物工業組合連合会・日本綿スフ織物工業連合会編『綿工連史』日本綿スフ織物工業組合連合会・日本綿スフ織物工業連合会、2006年。

レイチェル・カーソン日本協会（<http://j-rcc.org>）。

編集後記

「タオルびと」でも何度も繰り返し述べてきましたが、タオルは細かな分業によってつくられています。日本では、タオルのみならず多くの織物が分業で生産されていますが、とくにここ今治市周辺地域のタオル工業は、他の産地に比しても仕事内容が細かく分かれています。

今回とり上げた壺内タオルは、もともとタオルメーカーだったため社名に「タオル」が付いていますが、現在の本業は糸商です。産地内のタオル製造の分業は、タオルの原糸を調達するところからはじまるので、糸商の仕事はリレーに例えるなら一番走者にあたります。

ここ十数年、今治タオル工業の歴史を追いかけてきましたが、今治の糸商について書かれた資料がなかなか見当たりません。今回、壺内さんのタオル人生を振り返りつつ、糸商や今治糸友会についてたくさん教えていただきました。また、貴重な資料も拝見させていただきました。この場をお借りしまして、お礼申し上げます。

歴史資料の探索はこれからも継続するとして、今回のインタビューをとおして壺内さんが糸商として大きな役割を担っていることに新たな発見がありました。その役割とは、タオルメーカーへの原糸調達はもちろんですが、綿花栽培の現場を視察して気づいた問題をスルーせず受け止め、オーガニック Cotton の普及に努めていることです。オーガニック Cotton を広める活動は、そう簡単ではありません。なぜなら、利益優先の世のなかにあっても少しでも手間やコストを削減することが最優先される時代だからです。しかし、糸商の壺内さんだからこそ、可視化された問題があったわけです。

分業のメリットは多々ありますが、デメリットのひとつは「つくる様子」が見えないことです。これはタオル製造工程にも言えますが、タオルの原料となる綿花は日本ではつくられていません。かつて日本でも西日本を中心に綿花を栽培していましたが、輸入綿花の流入によって明治期に衰退しました。それ以来、日本の綿花は輸入品です。今、世界的なテキスタイル需要の増加によって綿花が急ピッチで栽培されていますが、綿花は害虫に弱いため、大量の農薬を使って栽培され、生産性を上げています。「格安ジーンズ」が流行っていますが、環境破壊という犠牲のうえに価格面でわれわれは恩恵を受けています。

しかし一方で、その恩恵のために命を落とす人たちがいることを忘れてはいけません。壺内さんの話をとおして、改めてそうおもいました。壺内さんが推薦する名著『沈黙の春』は、半世紀以上も前に人間や自然界に与える農薬の影響について警鐘を鳴らしています。われわれは、学習もできるし共感もできる生き物です。そこに希望を託したいとおもいます。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の36人目は、タオルの準備工程のうち撚糸加工を専門におこなう砂田撚糸（株）代表取締役社長の砂田周一氏である。タオル製造がピークを迎えた1980年代には150もの撚糸加工業者が今治に点在したが、現在は数社しか残っていない。砂田撚糸は、昨今のタオルの多様化・高付加価値化に伴う多品種小ロットの注文にも柔軟に対応し、差別化を図っている。

今回は、「タオルびと」では初の燃糸加工業者の砂田氏をとり上げる。

